

ヒラメの放流適地調査

栽培・深層水課
主任研究員 大場隆史

1 背景・ねらい

ヒラメは全国的に種苗放流が行われている栽培漁業の代表的魚種であり、本県においても年間約 20～30 万尾前後が放流されている。平成 20 年度に算出された放流種苗の回収率は 3.8%、経済回収率は 112%であり、今後はこの数字を高めるために、より効率的な種苗生産、種苗放流の方法を模索していく必要がある。そのためのアプローチのひとつとして、種苗の生残や成長を高めるために、放流場所や放流時期の条件を再検討することがあげられる。そこで本研究では、現行の放流方法を改良するために、ヒラメの天然稚魚の生育状況を、条件の異なるいくつかの場所で調査し、稚魚の生育に適した条件について検討した。

2 成果の概要

肥満度を放流適性の指標とし、県下 4 地先（図 1）で投網による調査を行ったところ、Stn.1 で採集されたヒラメ稚魚は他の調査地よりも肥満度が高いという結果が得られた。水温・塩分・底質粒度・餌料環境（胃内容物）からこのことについて検討すると、Stn.1 ではヒラメの初期餌料であるアミ類が他の調査地点よりもよく摂餌されており、この違いが肥満度に反映されていると考えられた。

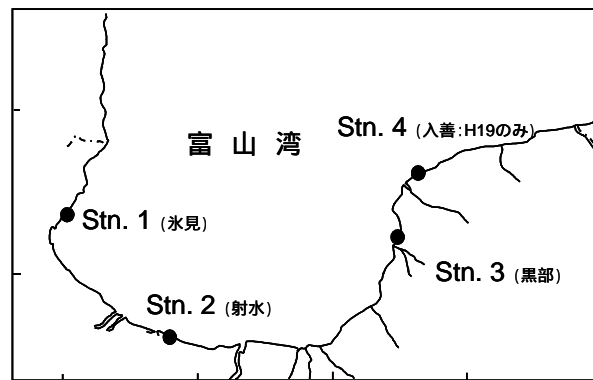


図1. 調査地点図

また、胃内容物中のアミ類をさらに分類すると、Stn.1 ではアミ亜科に属する特定のアミ類が胃内容物のほとんどを占めており、ある特定の餌料生物種の量が天然魚の肥満度に影響を与えている可能性が示唆された。

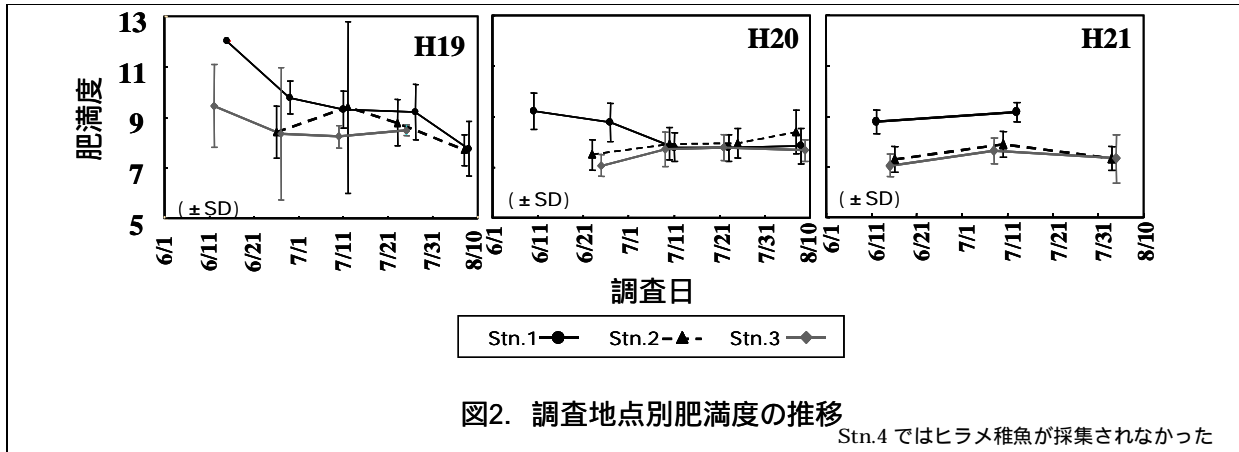
3 成果の活用面・留意点

本調査から、餌料生物環境が放流適性に対して重要である可能性が示された。今後は餌料生物相を広範囲で調査して具体的な放流適地・適期について検討する必要がある。また、今回の調査では水深約 1.5m 域までの天然稚魚の生息状況が明らかとなったが、水深 2～10m 域での調査も継続して行っていく必要がある。

4 問い合わせ先

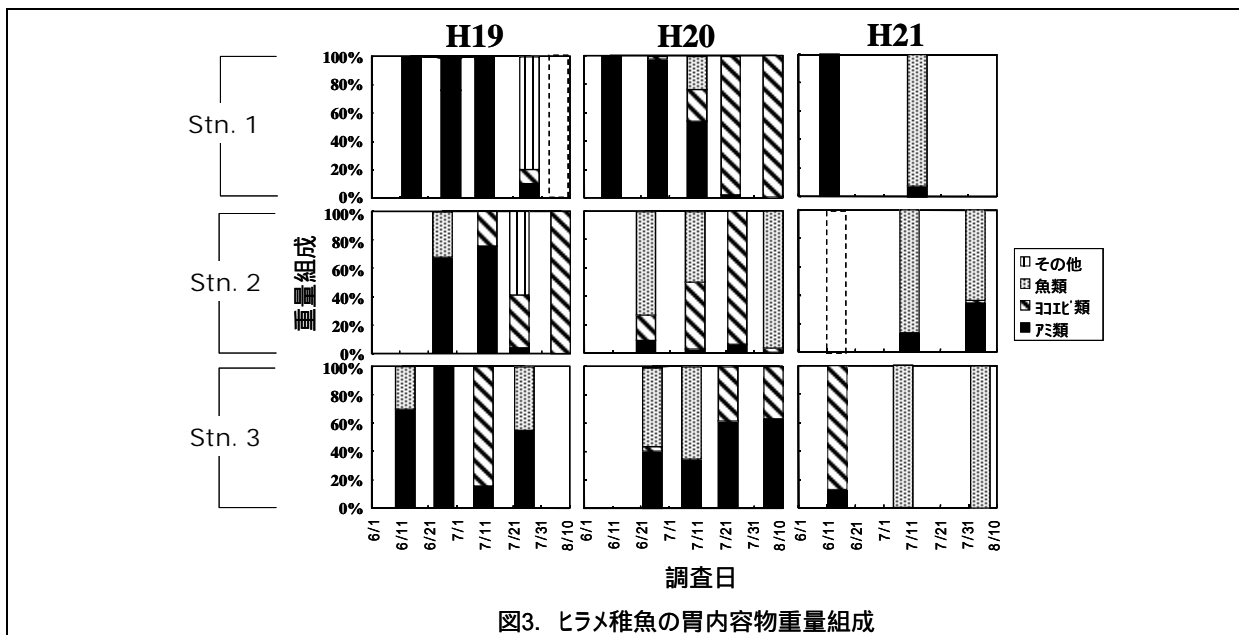
富山県農林水産総合技術センター水産研究所 栽培・深層水課
担当：主任研究員 大場隆史
TEL 076-475-0036

(参考) 具体的データ



【ヒラメ稚魚の肥満度の推移 (調査地点別)】

放流適性の指標として、肥満度(= 体重(胃内容物除く) / 全長³)を算出して地先間で比較したところ、6月下旬~7月上旬にかけてのStn. 1で肥満度が高い傾向が見られた。



【ヒラメ稚魚の胃内容物重量組成 (調査地点別)】

胃内容物中のアミ類に注目すると、6月上旬~7月下旬のStn.1では安定して高い割合でアミ類が出現し、肥満度と同様の傾向を示した。